

# 展覧会概要

会期：2019年7月2日(火)～9月22日(日)

会場：戸栗美術館

所在地：東京都渋谷区松濤1-11-3

開館時間：10:00～17:00(入館受付は16:30まで)

※毎週金曜日は10:00～20:00(入館受付は19:30まで)

休館日：第4週を除く月曜日

※7月15日(月・祝)、8月12日(月・振休)、9月16日(月・祝)は開館。7月16日(火)、8月13日(火)、

9月17日(火)は休館。

※毎月第4月曜日(7月22日、8月26日)はフリートークデーとして開館。

入館料：一般1,000円/高大生700円/小中生400円(団体20名様以上で200円割引)

※7月19日(金)から9月1日(日)の間、小中学生は入館料無料。

※9月16日(月・祝/敬老の日)は、65歳以上の方は入館料無料。

受付にて年齢のわかるものをご提示ください。

# 美術館概要

戸栗美術館は、創設者戸栗亨が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島家屋敷跡にある渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および、中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体であり、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



## 展示解説

当館学芸員による展示解説を行います。

■第2・第4水曜 14:00～15:00  
(7/10 7/24 8/14 8/28 9/11)

■第2・第4土曜 11:00～12:00  
(7/13 7/27 8/10 8/24 9/14)

■予約不要  
(入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください)

## フリートークデー

展示室でお話をしながらご鑑賞いただける日です。

■毎月第4月曜日(7/22 8/26)

■10:00～17:00(入館受付は16:30まで)

当日は30分間のミニ展示解説も開催。

■14:00～14:30

■予約不要  
(入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください)

## 次回展示

『たのしうつくし 古伊万里のかたちⅠ』  
2019年10月4日(金)～12月19日(木)

江戸時代の有田では需要に応えて多様なかたちの伊万里焼が生み出されました。今展では器種やデザイン、成形技法など様々な角度から古伊万里のかたちの魅力に迫ります。



## 展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館

広報担当 宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3

TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813

URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/>

E-mail: [kouhou@toguri-museum.or.jp](mailto:kouhou@toguri-museum.or.jp)

TOGURI MUSEUM OF ART  
戸栗美術館

TOGURI MUSEUM OF ART  
戸栗美術館

プレスリリース

連携企画展

# 青のある暮らし —江戸を染める伊万里焼—



## 連携企画展

### 「青のある暮らし 一着物・器・雑貨」

会場：太田記念美術館(東京都渋谷区神宮前1-10-10)

会期：2019年7月2日(火)～28日(日)

問い合わせ：03-3403-0880

<http://www.ukiyoe-ota-muse.jp/>

空や海の美しさをイメージさせる「青」という色彩は、江戸時代の人々を魅了し、暮らしのそばにあるさまざまなものを涼やかに彩りました。着物や食器、雑貨など、人々の身近にあった「青」の魅力について、浮世絵を通して紹介します。



会期：2019年7月2日(火)～9月22日(日)



## 生活に染みこむ「青」。

やきものの戸栗美術館と浮世絵の太田記念美術館(東京都渋谷区神宮前1-10-10)との初の連携企画展。共通展覧会名を「青のある暮らし」と題し、江戸時代の人々の暮らしを「青」という切り口から、各館の所蔵品を通じてご紹介いたします。相互入館割引や特別講演会に加え、東急百貨店本店(東京都渋谷区道玄坂2-24-1)との連携企画も。

# 青と共にあった江戸の生活。

※作品①～⑤の写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は、お手数ですが別紙写真借用申請書をお送りください。

江戸時代には染織技術が向上し、とくに藍染めが庶民に広まります。人々は暮らしのなかで浅葱(あさぎ)、縹(はなだ)、濃藍(こいあい)など濃淡様々な「青」を纏いました。同じく江戸時代に大きく発展した佐賀・有田の窯業に目を向けると、17世紀初めに誕生した日本初の国産磁器である伊万里焼の主力となったのは、白い素地に掛けられた透明な釉薬に柔らかくにじむ青色の文様をあらわした染付(そめつけ)。藍染めにちなんで、その呼び名がついたという染付は、時代ごとに表現に工夫を凝らし、青の趣を変化させながら発展していきました。

伊万里焼は、時代の流行を敏感にキャッチして新しいものを取り入れ続けたやきものです。なかでも、18世紀には需要層の拡大や食文化の発展などに伴い、染付の食器を中心に生産量が増加します。また、この頃から襖の引手や将棋駒など、金属や木材といった本来磁器以外の素材で作られる暮らしの道具を模した伊万里焼が登場。染付の伊万里焼は、江戸の生活を染める青色の一翼を担いました。

**今展は太田記念美術館との連携企画展。** 共通展覧会名を「青のある暮らし」として、江戸時代の人々の暮らしを「青」という切り口から、各館の所蔵品を通じてご紹介いたします。戸栗美術館では、江戸の暮らしのシンボルカラーであった「青色」の伊万里焼をご堪能ください。**東急百貨店本店との連携企画も開催。**

①染付 網目文 手鉢 伊万里  
江戸時代 (18世紀後半)  
口径 21.0 cm  
全体に網目文を描いた四方形の足つき手鉢。見込中央から側面、持ち手の部分へ途切れることなく網目がつながっている。江戸時代の浮世絵にしばしば手鉢が描かれているが、料理を盛り付けるほか、水を張って盃洗としている例もある。

①  
呑



酒を楽しむ磁器製のうつわは、伊万里焼が誕生する17世紀初頭から既に有田で作られていた。18世紀には、本来磁器以外の素材で作られる器形を模したもののが登場する。右上に掲載の水注は金属製の水注を模したもののひとつ。うつわを楽しむ遊び心が感じられる。

左：青磁染付 蝶唐草文 瓶 伊万里 江戸時代 (18世紀) 高 25.8 cm  
右下：染付 松竹梅文 猪口 伊万里 江戸時代 (17世紀末～18世紀初)  
口径 6.5 cm  
右上：染付 蝶唐草文 水注 伊万里 江戸時代 (19世紀) 高 14.7 cm

②染付 東海道五十三次文 皿 伊万里  
江戸時代 (19世紀)  
口径 55.7 cm  
歌川広重『東海道五十三次』の意匠を双六(すごろく)状にあらわした大皿。19世紀の大皿料理の流行により、有田では意匠を凝らした大皿が作られる。

③染付 蝶唐草文 箸立 伊万里  
江戸時代 (19世紀)  
高 11.2 cm  
七宝繋ぎの透彫り(すかしばり)を施した四足の箸立。箸立は複数人で大皿料理を囲む際には欠かせないものであり、本作もそうした宴席の場で使われたものと考えられる。19世紀の浮世絵にもしばしば描かれます。



③

# 食



⑤



⑤

# 粧



染付の伊万里焼は女性の美を彩る化粧道具も手がけている。

○鉄漿茶碗 (お歯黒を付ける際に用いるうつわ)  
左：染付 蝶唐草文 鉄漿茶碗 伊万里 江戸時代 (18世紀前半)  
口径 15.5 cm  
○油壺  
中央：染付 蝶唐草文 油壺 伊万里 江戸時代 (18世紀) 高 8.6 cm  
○合子 (紅入れ)  
右：染付 蝶唐草文 合子 伊万里 江戸時代 (18世紀) 脊径 6.0 cm

左：⑤染付 白抜蝶唐草文 蓋付碗 伊万里  
江戸時代 (18世紀前半) 口径 12.6 cm  
右：染付 蝶唐草文 平碗 伊万里 江戸時代 (18世紀)  
口径 11.8 cm  
18世紀は食文化が花開いた時期。当時の食事スタイルに合わせた多様な形のうつわが作られた。  
例えば蓋付碗と一口に言っても、蓋が内面に入り込むタイプや漆器を模した平蓋など様々。遊び心をくすぐるうつわが食卓を彩った。

